膳大丘による金剛蔵菩薩撰『金剛般若経注』将来の背景

松本信道

はじめに

古代には遣唐使の派遣などによって膨大な経論疏が日本に将来された。それらを基礎にして南都六宗に代表される多くの学団が形成された。その際、それらの経論疏がどのように受容されていったかという問題は、日本古代仏教の特質を考える上で重要な課題である。

筆者は、特に経論疏をめぐる真偽論争に興味を抱き、いくつかの論考を発表してきた。その一つに『釈摩訶衍論』をめぐる真偽論争がある。その発端となったのが、宝亀一〇年に入唐帰朝した大安寺の戒明が将来した『釈摩訶衍論』を通読した淡海三船が、その論疏が偽論である旨を将来者の戒明に伝えたことにあり、その書状「送戒明和尚状」が伝えられている。(1)

筆者は、別稿において、その書状を取り上げ、古文書学的・思想的な面から再検討を加えたことがある。(2) その結果、書状の史料的信憑性は高く、その思想的内容の高度さから推定すると、この書状は、淡海三船以外には書けなかったのではなかろうか、という結論を得た。しかし、いくつかの重要な問題について言及できなかった。その一つに、淡海三船が偽

論将来の先例としてあげた膳大丘の金剛蔵菩薩撰『金剛般若経注』将来の問題がある。

「送戒明和尚状」の前半は、『釈摩訶衍論』の内容について、淡海三船が四つの疑問点を提示して、同論が偽論であることを示したものである。その末尾に

昔膳大丘、従レ唐持来金剛蔵菩薩注金剛般若経、亦同二此論一、并偽妄作也。

とあり、この書状が書かれた宝亀一〇年より以前に、膳大丘が入唐して唐より将来した金剛蔵菩薩撰『金剛般若経注』も、また「此論」＝『釈摩訶衍論』と同様に、いずれも「偽妄作」＝偽論であると指摘している。偽論将来の先例として、膳大丘の『金剛般若経注』将来の例を示しているのである。

この記述から、戒明の『釈摩訶衍論』将来以前に、膳大丘が将来した金剛蔵菩薩撰の『金剛般若経注』をめぐる真偽論争が存在したことが判明する。

本稿では、以下の点について検討してみたい。第一の課題は、膳大丘の入唐・帰朝の経過を把握し、その入唐の目的・滞在中の活動と帰朝の際の様相を確認すること。第二の課題は、何故、膳大丘が帰朝に際して金剛蔵菩薩撰『金剛般若経注』を将来したのか、その歴史的・思想史的背景を考えること。第三の課題は、何故、淡海三船はそれを偽論と断定したのか、その理由を考察すること。第四の課題は、金剛蔵菩薩撰『金剛般若経注』将来の意義について検討することである。

一、膳大丘の入唐・帰朝

最初に、膳大丘の入唐の時期についてみると、『続日本紀』神護景雲二年七月辛丑条に「大丘天平勝宝四年。随レ使入唐。[3]」と記され、同様に『令集解』学令・釈奠条所引の神護景雲二年七月三〇日官符にも「天平勝宝四年。大丘随レ使入唐。[4]」と見えることから、天平勝宝四年であったことが明確である。天平勝宝度の遣唐使の派遣の経緯についてみると、

派遣の計画は天平勝宝二年九月に始まる。すなわち、

任二遣唐使一、以二従四位下藤原朝臣清河一為二大使一、従五位下大伴宿祢古麻呂為二副使一、判官主典各四人。[5]

とみえ、大使に藤原朝臣清河、副使に大伴宿祢古麻呂、判官四人、主典四人が任命された。翌年二月に、遣唐使の雑色人一一三人に叙位があり、[6]同年四月に

遣二参義左中弁従四位上石川朝臣年足等一、奉二幣帛於伊勢太神宮一。又遣レ使奉二幣帛於畿内七道諸社一、為レ令二遣唐使等平安一也。[7]

とあり、遣唐使の平安を祈願して、石川年足等を伊勢太神宮に派遣し、また畿内および七道の諸社に使者を派遣して幣帛を奉っている。そして、同年十一月に吉備真備が副使に追加任命された。[8]

翌天平勝宝四年三月に遣唐使等は拝朝し、[9]翌閏三月に

召二遣唐使副使已上於内裏一、詔給二節刀一。仍授二大使従四位上藤原朝臣清河正四位下、副使従五位上大伴宿祢古麻呂従四位上、留学生无位藤原朝臣刷雄従五位下一。[10]

とあり、遣唐使に節刀が授けられ、大使の藤原清河、副使の大伴古麻呂とともに、留学生の藤原刷雄（藤原仲麻呂の子）が叙位された。その後、遣唐使一行は難波に向かい、まもなく出航した。膳大丘がいずれの船に乗船したかは不明である。同時に入唐した人々として入唐留学僧の行賀と留学生の藤原刷雄、延慶、船夫子などが知られている。

入唐後の動向についてみると、上田雄氏によると、遅くとも七月中には四船とも明州とその周辺に到着し、越州を経て長安を目指したものと推定されるという。[11]大使一行は、翌年天平勝宝五年正月朔日、長安の蓬萊宮含元殿での元日朝賀において、諸蕃の使節と共に拝朝した。そのとき新羅と席次について争ったという著名な事件が伝えられている。[12]

膳大丘も使節に同行し、長安に赴いたことが、『続日本紀』神護景雲二年七月辛丑条の史料から窺える。

大学助教正六位上膳臣大丘言。大丘天平勝宝四年。随レ使入唐。問二先聖之遺風一。覧二膠庠之余烈一。国子監有二両門一。

題曰二文宣王廟一。時有二国子学生程賢一。告二大丘一曰。今主上大崇二儒範一。追改為レ王。鳳徳之徴。于レ今至矣。然准二旧典一。猶称二前号一。誠恐乖二崇レ徳之情一。失二致レ敬之理一。大丘庸闇。聞斯行レ諸。敢陳二管見一以請二明断一。勅号二文宣王一。[13]

右の内容は、膳大丘が国子監の孔子廟を参観した時に、その題額が「文宣王廟」となっていた旨を指摘して、日本でも孔子の尊号を「文宣王」に改めるべきであると奏上して、それが勅許されたという記事である。この史料から、膳大丘が使節と同行し長安に赴き、そこを中心に活動していたことが判明する。

『東大寺要録』巻一所引の『延暦僧録』逸文「勝宝感神聖武皇帝菩薩伝」には、玄宗皇帝の勅命により、朝衡（阿倍仲麻呂）と日本使が府庫と三教殿を巡覧する様子が記されている。

又勅二命朝衡一領二日本使一。於二府庫一一切処遍宥。至レ彼披二三教殿一。初礼二君主教殿一。御座如レ常荘飾。九経三史。架別積二載厨龕一。次至二御披老君之教堂一。閣少高顕。御座荘厳少勝。厨別龕函盈二満四子太玄一。後至二御披釈典殿宇一。顕教厳麗殊絶。龕函皆以二雑宝一厠填。檀沈異香荘二挍御座一。高広倍二勝於前一。（中略）御座及案経架宝荘飾尽二諸工巧一。[14]

右の史料から、日本使らが、君主教（儒教）殿、老君之教（道教）堂、釈典（仏教）殿の三教殿の様子が詳細に描かれ、それらを参観したことが知れる。「未度書」の将来という重要な任務を担って入唐した留学生・学問僧（留学僧）と請益生・還学僧（請益僧）が、日本使の一員として、三教殿の巡覧に同行した可能性は充分に考えられる。すると、請益生の膳大丘もそれに随行したのではなかろうか。

次に帰朝の年時について検討してみたい。『続日本紀』によると、この天平勝宝六年正月一六日（壬子）に副使の大伴古麻呂が唐僧鑑真・法進ら八人とともに帰国（第二船）し、翌一七日（癸丑）にはもう一人の副使の吉備真備の船（第三船）が紀伊国牟漏埼に来着し、四月一八日（癸未）になると、判官の布施朝臣人主の船（第四船）が薩摩国石籬浦に来着

したとの報告が大宰府から寄せられた。

大使の藤原清河と阿倍仲麻呂の乗った船（第一船）は、阿児奈波嶋（沖縄嶋）で座礁し、再出発したものの逆風に遭い清河らは結局、唐に戻ることになった。判官の大伴御笠と巨万大山は四月七日（壬申）に大伴古麻呂・吉備真備とともに叙位に与っているので、第二もしくは第三船で帰国したのであろう。[15]

問題は、膳大丘がいずれの船で帰国したかであるが、高木訥元氏は、膳大丘の名が、天平勝宝七年四月の造東大寺司より興福寺三綱所への請経使として、その名が記載されているから、[16]その帰国は天平勝宝五年十二月七日に益久島に到着した副使の吉備真備の船（第三船）か、あるいは天平勝宝六年正月に帰朝した副使の大伴古麻呂の船（第二船）によってのことと推定されている。[17]もし後者であったなら、鑑真、法進、思託等と同じ船で帰朝したことになる。しかし淡海三船が宝亀一〇年に撰述した『唐大和上東征伝』には膳大丘への言及はみられないことから考えると、鑑真らの船とは別の船であったのではなかろうか。すると、第三船か第四船ということになる。しかし、天平勝宝七年四月に興福寺三綱所への請経使となっていることから考えると、第四船が薩摩国石籬浦に到着したのが、四月一八日（癸未）であり、それから入京して仕官するまでには、時間的に無理が生じる。故に、吉備真備の船（第三船）で帰国した可能性が高いのではなかろうか。

二、膳大丘の将来の背景

本節では、第二の課題である、何故に、膳大丘が帰朝に際して金剛蔵菩薩撰『金剛般若経注』を将来したのかという点について、その歴史的・思想史的背景について考察してみたい。

その問題を考える上で、膳大丘が入唐した目的が何であったか、という点が重要である。天平勝宝度の遣唐使派遣目的

についてみると、蔵中進氏は、戒師招請のことが含まれていたことを想定する説を提唱され、[18] 東野治之氏は、阿倍仲麻呂の帰国推進に加え、唐の文人の招請という任務が課せられていたとする説を述べられておられる。[19] 他面、水野柳太郎氏は、「新羅進攻実現に際して、唐がいかなる態度をとるかを判断する根拠を求める軍事的目的もあった」[20] と推定されておられる。

また、仏教経典の将来が入唐の目的であったと想定する説もある。すなわち、石田茂作氏は、入唐廻使による請来経典を検討され、「予め立案して将来されたもの、様である」[21] と述べ、藤野道生氏は、未入手のまま欠本となっていた経典の補充・収集を使命としていたとする。[22] さらに、大平聡氏は「未将来の経典入手だけでなく、組織的な経典入手が課題として与えられていた」ことを指摘され、その中心的役割を果たしたのが、膳大丘であったと推測されておられる。[23] この大平聡氏の説は、膳大丘の入唐後の動向と帰朝に際して経論を将来した背景を考える上で、重要な視点である。

問題になるのは、膳大丘の入唐者としての身分である。すなわち、留学者には長期滞在の留学生・学問僧（留学僧）と、短期滞在の請益生・還学僧（請益僧）があり、長期と短期という滞在形態と入唐目的に相違があった。前者は次の使節が到来するまでの間、後期遣唐使の場合では一五年―二〇年間も中国に滞在して、各人が目的とする唐文化の習得や仏教理解の研鑽に努めるもので、後者はその回の使人の滞在期間、約一年ほどのうちに、やはり各人が習得すべき課題に短期集中的に取り組むことになる。[24]

膳大丘の場合は、留学生とする説[25]もあるが、後述するように滞在期間が短期であったことから、請益生とする説が首肯できる。[26] この点は、入唐の目的とも密接に関連する。山下克明氏は

請益の使命は、各々が所属する学問分野を代表して、その当時の差し迫った疑問事項の回答を遣唐使という国家プロジェクトの一員として唐に求めることにあり、その方法は難義・未決を提出するという形式に共通点が認められる。

そしてこれらに対する唐の学者・学匠の回答が、問答・唐答・唐決であったと考えられる。[27]

と述べ、「難義」の提出という行為に請益の主要な機能を認めることができるという。同様に、森公章氏も、請益生の場合は、唐の著名な知識人や僧侶に対して日本側の疑問点（「難義」）を示し、それに解答をもらうというかたち（「唐決（釈）」）で任務を果たすこともあったという。[28] この問題については、筆者も以前に『東大寺六宗未決義』を取りあげ、検討したことがある。[29] その結果、請益生（僧）には、「難義」・「未決義」に対する「唐決」を得るということと、もう一つの「未度書」の将来という重要な任務があり、それらが入唐の目的であったことが判明した。この点から考えると、膳大丘が「未度書」の金剛蔵菩薩撰『金剛般若経注』を将来したということは、当然の帰結であり、その課せられた任務を忠実に実行した結果であったといえよう。

それらの入唐の目的を遂行するために、膳大丘は国子監の孔子廟を参観し、三教殿の巡覧などに随行したのではなかろうか。

経論の蒐書活動についてみると、できるだけ良いテキストの蒐集を心がけたろうが、その目的を達するのは容易ではなかったろうと推測できる。そのことを考える上で、榎本淳一氏の漢籍将来の状況に関する研究が参考になる。同氏によると、遣唐使の文化使節としての成果が拡大解釈された結果、遣唐使は何でも自由に持ち帰ることができたかのような幻想を生んできた。しかし、遣唐使にはさまざまな制約があり、善本・完本ばかりを写し取ることなど不可能であったこと、結果として、多くの端本・異本や素性の定かでない本を持ち帰らざるを得なかったこと、ある意味では手当たりしだい可能なかぎり底本を借り出し、写し取るのが精一杯であったこと、などが指摘されている。[30] おそらく膳大丘の経論の蒐集活動も漢籍の場合と同様な労苦を強いられたのではなかろうか。

第二の理由として、『金剛般若経』をめぐる受容過程ということが考えられる。

日本古代における『金剛般若経』の伝来と受容については、すでに、鈴木一馨[31]・田村圓澄[32]・中林隆之[33]の諸氏をはじめ、多くの研究が蓄積されており、その護国的性格・役割と「祈病」「死者追善」「災異消滅」「疫瘡滅除」のために受容されて

いたことなどが指摘されている。

山本幸男氏は、玄宗皇帝が『金剛般若経』に注釈を加え、それに道氤が布演して注釈書を著したことが、膳大丘の『金剛般若経注』将来の背景にあるのではないだろうかと推定されている。[34] すなわち、開元二四年（七三六）に、玄宗が自ら『金剛般若経』に注釈を加え『御注金剛般若経』を著し、それに道氤が布演して『御注金剛般若波羅蜜経宣演』を著し、それが人々の注目を集め、『金剛般若経』に対する関心は法相系の人々の間でも高かったこと、その存在を知った大丘は『金剛般若経』への関心をかき立てられ、『同経』にまつわる注釈書を収集して日本に持ち帰ったものと見られる。その中に、金剛蔵菩薩撰『金剛般若経注』も含まれていたと推測されておられる。この山本幸男氏の説は、首肯できる。

この天平勝宝度の入唐廻使の将来した経典の内容について、石田茂作氏は「未度の経巻が入唐廻使に依って将来された事は、経典伝来史上特筆すべきことである」と高く評価している。[35] それに対して藤野道生氏は、入唐廻使によって伝えられた経典のうち、約半数は同本異訳の前訳本が既に伝わっていること、また残りの半分についても、その殆どが中国撰述の雑経であり、教義の面から見ると、わが仏教界に如何ほどの影響を与えたか疑問であり、入唐廻使の請来した経典は、単に欠本補充としての意味しかなかったと指摘し、石田茂作説を批判されている。[36]

次に問題となるのは、俗人の請益生の膳大丘が仏教の経典を将来ている点であろう。しかし、それにはすでに先例がある。すなわち、石山寺蔵『遺教経』の奥書に

唐清信士陳延昌、荘二厳此大乗経典一、附二日本使国子監大学朋古満一、於レ彼流伝
開元廿二年二月八日従レ京発記。[37]

と記され、天平度の遣唐使に従って留学した日本使が、唐人の陳延昌から『遺教経』を付託され、これを流伝させるべく日本へ持ち帰ったことが知れる。日本使を「朋古満」と解読し「大伴古麻呂」とする説と、「羽右満」と読んで「羽栗吉麻呂」とする説があり、議論が分かれる。[38] いずれにしろ、俗人である日本使が仏教経典を将来していることが窺える。故に、

俗人である膳大丘が仏教経典を将来したことは、特異なことではない。

三、金剛蔵菩薩撰『金剛般若経注』と真偽論争

第三の課題は、何を根拠に淡海三船は、金剛蔵菩薩撰『金剛般若経注』を偽論と断定したのか、その理由を考察することである。金剛蔵菩薩撰述の注釈書として『観世音経讃』一巻と『金剛般若経注』一巻があり、日本に伝来していたことが知られている。すなわち、『観世音経讃』については、正倉院文書[39]や『東域伝灯目録』[40]などに散見し、『金剛般若経注』については、前述の淡海三船の「送戒明和尚状」[41]や『常暁和尚請来目録』[42]および『東域伝灯目録』[43]などに見え、平安末期まで存在したことが確認できる。しかし、それらの写本自体は伝えられておらず、その内容については不明であった。近年、伊吹敦氏によって、敦煌出土の経論より、金剛蔵菩薩撰とされる『観世音経讃』と『金剛般若経注』が発見され、その内容が世に知られるようになった[44]。すなわち、敦煌出土スタイン本二五一一号、及びペリオ本二二一六号の二つの写本があり、その内容は全く同一であり、金剛蔵菩薩撰の『金剛般若経注』であることが論証された。さらに同氏によって、二つの写本を校合され、より完全な本文が翻刻された[45]。このテキストによって、金剛蔵菩薩撰の『金剛般若経注』の具体的な内容を知ることができるようになった。

伊吹敦氏の研究によると、「金剛蔵菩薩」という名の菩薩は、種々な経典に見ることができ、作者に最も大きな影響を与えたのは、『華厳経』の「十地品」で、その別行本である『十地経』の「金剛蔵菩薩」に擬えることで、真の修行者としての自覚を表明しようとしたのであろうという。その成立時期は、八世紀の前半のかなり早い時期で、両注釈書は、同じ人物によってか、或いは、思想的傾向を同じくするグループ内で、時をおかずに、相次いで製作されたであろうと推定されておられる。また、天平八年に来朝した道璿によって『観世音経讃』が将来されたと推定されておられる。

その金剛蔵菩薩撰の内容について見ると、伊吹敦氏は、両注釈書に共通する注釈的態度として、附会的傾向が極めて強いということ、また悟りへの実践という視点から、自らの禅定体験に基づいて経文を理解することに価値を見出すという立場であることに、金剛蔵菩薩撰の特有の思想的傾向があることを指摘されておられる。山本幸男氏は、この伊吹敦氏の見解を敷衍され、従来の注釈書とは異なり悟りへの実践という視点から附会的な経文解釈が目立つという『金剛般若経注』（金剛蔵菩薩注）に違和感を抱き、偽妄の作の烙印を押すに至ったのであろうと、述べられておられる。そして、淡海三船が、この書を偽妄の作と断じたのは、師の道璿から北宗禅で重視される『金剛般若経』の解釈法を伝授され、同経について相当深い見識があったことが、偽論と断定する根拠になったのではないかと推定されておられる。(46)『金剛般若経注』の内容が、通常の経旨と大いに異なるものであったことは、『東域伝灯目録』に「三船王判為二偽妄一。今披二見之一。誠以難レ信」と記されていることから理解できよう。

四、膳大丘の思想的背景

蔵仲進氏は、戒明や膳大丘が真偽論争を巻き起こした経論疏を将来した背景として、

戒明あるいは膳大丘、その他多数の唐よりの帰朝者たちは多数の経典類を齎したが、そのなかにはかなりいかがわしいものもあったらしいこと。――入唐した邦人の無智につけこんで、いわゆるツカマサレルというケースもあったこととと思われ、他にもこのような例はあったと思われる。(47)

と述べ、入唐者の無智につけこんで、かなりいかがわしいもの（偽論）を「ツカマサレ」た例として二人を挙げておられる。しかし、私見によれば、二人が無知であったとは考え難い。以下、本節では、膳大丘の思想的背景について考察してみたい。

膳大丘の学識として最初に挙げられるのが、儒学に通暁していたことであろう。まず、前述した如く、入唐に際して請益生という身分であったこと、そして入唐後、国子監の孔子廟を参観していることから、若年から儒学を学んでいたことが窺える。さらに、帰朝後の官歴を見ると、神護景雲二年七月に大学助教[48]となり、宝亀一〇年二月には大学博士[49]の位置にあり、豊後介を兼ねていた。また興福寺僧常楼の卒伝に、常楼が膳大丘らと親しく交わり、外伝を学習したことがみえる。[50]以上のことから、膳大丘が儒学に通暁していたことが明白である。

しかし、膳大丘は、儒学のみならず仏教にも造詣が深かったことが窺える。天平勝宝五年五月七日類収「写経奉請牒」に、「便使」[51]と見え、また天平勝宝七歳四月二一日「造東大寺司牒」には、経典「奉請」[52]使と見えることから、膳大丘が「経の搬送者」であったことが知れる。さらに、天平勝宝七歳八月一六日「某寺勘経所牒」には、「勘経」[53]に従事していたことが知れる。「某寺勘経所」を「普光寺勘経所」とする説[54]もあるが、大平聡氏が論証された如く、「興福寺勘経所」とするのが妥当である。[55]

「勘経」という用語は、宮崎健司氏によると、天平勝宝年間に初見し、「勘経所」も同時期にあらわれるという。[56]「勘経」とは、山下有美氏によると、「底本とは別のテキスト（証本）によって校訂すること」を「勘経」と呼び、「書写の後、底本によって校正」する「校経」とは異なり、「別のテキスト」を使う点に違いがあるという。[57]「勘経」の作業は、官人と複数の僧によって行われ、僧が経典を「読」むのを聞きながら、官人が「正」していった。故に、官人には漢文の豊富な知識が要求され、彼ら官人が単なる事務官としてではなく、勘経の実行主体の一員であったことなどを、大平聡氏は指摘されている。[58]

「勘経」という行為そのものの意義について宮崎健司氏は、

（1）勘経が実施される以前の写経が、伝存した経典群をそのまま伝写するのに対して、本経の内容にも注意を払い、経典を校訂しようとする姿勢があらわれたことを意味すること、

（2）「勘経」には、底本の校訂のみでなく、別生経や同本異訳などの関係の諸仏典を総括的に捜索し、網羅的に参照しようとする姿勢が窺えること、

（3）別生経や同本異訳が参照されたのは、経論が漢訳される際に生じた削除や誤謬などを確認しようとするものであったこと、

などを指摘され、「勘経」が、「仏典内容にも立ち入った」、いうなれば「仏典研究にも値する事業であった」と意義付けておられる。[59] 傾聴に値する意見である。

右の点を勘案すると、入唐以前から「別生経や同本異訳」に対して関心を抱いていたであろう膳大丘が、「同本異訳」に類する金剛蔵菩薩撰『金剛般若経注』を将来することは、自然のような気がする。

山本幸男氏は、前述の如く、膳大丘が善珠の弟子で興福寺僧の常楼と外典の学習をしたと伝えられることから、興福寺僧との交流を通して法相教学にも親しんでいたと推定されておられる。[60]

さらに注目すべきことは、佐伯有清氏によって解明されたところの、膳大丘が『華厳経』を研究し、同経についての注釈書を撰述していたという点である。すなわち、同氏によると、円珍の「山王院蔵書目録」に見える「膳氏」を「膳大丘」と推定され、膳大丘が『華厳序注』と『華厳序釈』の撰述書を著していたことを指摘されている。[61]

以上のことを総合すると、膳大丘が、便使・経典奉請使・勘経に従事していたこと、および『華厳経』の注釈書を撰述していたことから、経典に精通し、儒学のみならず仏教にも造詣が深かったことが窺える。

五、『金剛般若経注』将来の意義

第四の課題は、金剛蔵菩薩撰『金剛般若経注』将来の意義について検討することである。

伊吹敦氏は、金剛蔵菩薩注が、初期の北宗の禅思想をそのまま継承したものであり、初期禅宗史を解明する上で、極めて重要な資料であることを指摘されておられる。すなわち、金剛蔵菩薩注が、神秀（六〇五？～七〇六）に発し、普寂（六五一～七三九）に完成した文献であり、北宗禅の思想を伝える文献としては最古のものであること、道璿の師である普寂の思想、或いは、その周囲で行われていた禅思想を考える上で、極めて重要な資料であるという。[62]

山本幸男氏は、膳大丘らの天平勝宝六年の入唐廻使が持ち帰った唐の玄宗皇帝の『金剛般若経』尊重策が、藤原仲麻呂による天平宝字二年における『金剛般若経』大量書写事業に反映されていること、また膳大丘が将来した『金剛蔵菩薩注』に対する淡海三船の反応から窺われるように、為政者だけではなく仏道修行に励む人々の間にも『金剛般若経』に対する新たな関心をかき立てたこと、さらには『金剛般若経』の新来の注釈書が、文人間さらには僧尼間にも影響を与えていたことを指摘されておられる。[63]

以上のことから、膳大丘の金剛蔵菩薩撰の『金剛般若経注』の将来が、思想的には、北宗禅の思想を伝える文献を日本に紹介し、『金剛般若経』に対する新たな関心を促し、文人や僧尼などにも影響を与えたと評価できよう。また歴史的には、藤原仲麻呂の『金剛般若経』大量書写事業に反映されたことが、特筆されよう。

むすびにかえて

最後に、淡海三船と膳大丘との人的関係について考えてみたい。蔵中進氏は、疾病のために渡唐することができなかった淡海三船の胸中に深い傷とコンプレックスがあり、それが戒明や膳大丘の将来した新来の経論疏に対して、「アラ捜しに熱中した厚い執念」を深く感じるという。[64] 同様に、高木訥元氏も、「入唐留学制亭によるコンプレックス」[65]が、戒明と膳大丘への批判の根底にあるとし、伊吹敦氏も、病気のため入唐できなかったことによる、「その怨み辛み」が淡海三船に

あり、そのために膳大丘に厳しく対応したのではないかと推定されておられる。[66] しかし、如上の諸氏の見解には、従うことはできない。私見によれば、淡海三船は、諸氏の説かれるような狭量な人物ではなく、仏教にも深い学識をもっており、純粋に新来の経論疏を熟読し、それらが通常の経旨と異なることから偽論と断定した結果だと考える。また、膳大丘が、宝亀一〇年に、大学頭である淡海三船の下にあって大学博士に任命されていたことから考えると、淡海三船と膳大丘とは友好関係にあったことが窺えよう。

註

（1）淡海三船の「送戒明和尚状」の自筆原本は残されていないが、諸書に引用されている。その初見は、『アキャシャ鈔』巻第一八の「釈摩訶衍論真偽事」所引「三船真人送戒明和尚状」（『真言宗全書』巻二一所収、一四三頁、一九三四年六月）である。以下、『宝冊鈔』巻第八の「釈摩訶衍論真偽事」所引「三船真人送戒明和尚状」（『大正新脩大蔵経』第七七巻〈続諸宗部八〉所収、八二〇頁c～八二一頁a、一九三一年一一月）、『唯識論第二巻同学鈔第四』「真如受薫事」（『大日本仏教全書』第七六冊、一九八三年七月覆刻版、三五七頁～三五八頁）、『唯識論同学鈔』巻第一九（二之五）「真如受薫」（『大正新脩大蔵経』第六六巻〈続論疏部四〉所収、一七五頁b～c、一九三一年一一月）などに見える。そのほか近年、後藤昭雄氏が発見された大阪府河内長野市金剛寺蔵の『龍論鈔』に「送戒明和尚状」が引用されている（後藤昭雄「『延暦僧録』考」〈『国語と国文学』第六五巻第二号、一九八八年二月〉、のち同氏『平安朝漢文文献の研究』に再録、一九九三年六月、吉川弘文館）。

（2）拙稿「淡海三船『送戒明和尚状』の再検討」（『駒澤大学　佛教文学研究』第一三号、二〇一〇年三月）。

（3）『続日本紀』神護景雲二年七月辛丑条（『新訂増補　国史大系』第二巻、三五七頁）。

（4）『令集解』巻十五　学令　釈奠条（『新訂増補　国史大系』第二三巻、四四五～四四六頁）。

（5）『続日本紀』天平勝宝二年九月己酉（二四日）条（『新訂増補　国史大系』第二巻、二一一頁）。

（6）同右、天平勝宝三年二月庚午（一七日）条、（同右、同頁）。

（7）同右、天平勝宝三年四月丙辰（四日）条（同右、同頁）。
（8）同右、天平勝宝三年一一月丙戌（七日）条（同右、同頁）。
（9）同右、天平勝宝四年三月庚辰（三日）条（同右、二一三頁）。
（10）同右、天平勝宝四年閏三月丙辰（九日）条（同右、同頁）。
（11）上田雄『遣唐使全航海』（草思社、二〇〇六年、一二七頁）。
（12）『続日本紀』天平勝宝六年正月丙寅条（『新訂増補　国史大系』第二巻、二一九頁）。
（13）同右、神護景雲二年七月辛丑条（同右、三五七頁）。同様の記事が『令集解』にも見える（『令集解』巻一五　学令　釈奠条〈『新訂増補　国史大系』第二三巻〉、四四五～四四六頁）。
（14）筒井英俊校訂『東大寺要録』、国書刊行会、一九四四年初版、二一頁。
（15）山本幸男「天平宝字二年の『金剛般若経』書写――入唐廻使と唐風政策の様相――」（大阪市立大学日本史学会編『市大日本史』第四号、二〇〇一年）。
（16）天平勝宝七歳四月二十一日「造東大寺司牒」（『大日本古文書』第二五巻、一八五～一九三頁）。
（17）高木神元「弘法大師空海の入唐求法への軌跡」（『高野山大学密教文化研究所紀要』第一三号、二〇〇〇年二月）。
（18）蔵中進「日本使国子監大学朋古満の周辺」（『唐大和上東征伝之研究』桜楓社、一九七六年、四四五頁）。
（19）東野治之「唐の文人蕭穎士の招請」（『遣唐使と正倉院』所収、一九九二年、岩波書店）。
（20）水野柳太郎「新羅進攻計画と藤原清河」（同氏編『日本古代の史料と制度』所収、二〇〇四年、岩田書院）。
（21）石田茂作『写経より見たる奈良朝仏教の研究』第一編第四章、四〇頁。
（22）藤野道生「天平勝宝年間における将来経疏私考（二）」（『文経論叢』〈弘前大学・人文学部〉六巻第四号、史学編VI、一九七一年）。
（23）大平聡「天平勝宝六年の遣唐使と五月一日経」（笹山晴生先生還暦記念会編『日本律令制論集』上巻所収、一九九三年、吉川弘文館）。
（24）森公章「遣唐留学者の役割」（『遣唐使船の時代――時空を駆けた超人たち――』第四章所収、一〇三～一〇五頁、二〇一〇年、角川学芸出版）。
（25）大平聡前掲注（23）論文。
（26）森公章前掲注（24）論文、加藤順一「律令官人と遣唐使――叙位と経歴に関する分析を中心に――」（利光三津夫編『法史学の諸

問題』所収、一九八七年）、山下克明「遣唐請益と難義」（『古代文化史論攷』第九号、一九八九年一二月）、森公章『遣唐使の光芒――東アジアの歴史の使者――』（角川選書、二〇一〇年四月）。

（27）山下克明前掲注（26）論文。

（28）森公章前掲注（24）論文。

（29）拙稿「『東大寺六宗未決義』の思想史的意義」（『駒沢史学』第六一号、二〇〇三年）。

（30）榎本淳一「遣唐使による漢籍将来」（『唐王朝と古代日本』所収、二〇〇八年、吉川弘文館）。

（31）鈴木一馨「日本における金剛経の受容」（阿部慈園編『金剛般若経の思想的研究』所収、一九九九年一〇月、春秋社）。

（32）田村圓澄「『金剛般若経』の研究・流通」（『古代国家と仏教経典』第二部第三章所収、二〇〇二年六月、吉川弘文館）。

（33）中林隆之「護国経典の読経」（『日本古代国家の仏教編成』第二章第二節、二〇〇七年二月）。

（34）山本幸男前掲注（15）論文。

（35）石田茂作前掲注（21）書。

（36）藤野道生前掲注（22）論文。

（37）大屋徳城『石山写経選』図八、（便利堂、一九二四年）、石山寺文化財綜合調査団『石山寺の研究――一切経篇――』（法蔵館、一九七八年）三一二頁。

（38）主な先行研究を挙げると、蔵中進前掲注（18）論文（四四七頁）、佐藤信「入唐交流史の一齣」（『奈良古代史論集』一、奈良古代史談話会、一九八五年）、茂在寅男『遣唐使研究と史料』（東海大学出版会、一九八七年、二三一頁）、王勇『唐から見た遣唐使』（講談社、一九九八年、一五一～一五四頁）、東野治之前掲注（19）論文（七五頁）、水野柳太郎前掲注（20）論文、三九～四六頁、矢野健一「『井真成墓誌』と第一〇次遣唐使」（専修大学・西北大学共同ポロジェクト編『遣唐使の見た中国と日本』朝日新聞社、二〇〇五年）、河内春人「石山寺遣経奥書をめぐって」（『続日本紀研究』第三六三号、二〇〇六年八月）などがある。

（39）天平一二年の「写経所啓」（『大日本古文書』第七巻四八八頁）、天平一八年三月一六日の「題師充本帳」（同上第九巻一四〇頁）。

（40）『東域伝灯目録』（『大正新脩大蔵経』第五五巻一一四八頁c、一一五〇頁b）。

（41）前掲注（1）。

（42）『常暁和尚請来目録』（『大正新脩大蔵経』第五五巻一〇六九頁c）。

(43)『東域伝灯目録』（『大正新脩大蔵経』第五五巻一一四七頁c）。
(44) 伊吹敦「北宗禅の新資料――金剛蔵菩薩撰とされる『観世音経讃』と『金剛般若経註』について――」（『禅文化研究所紀要』第一七号、一九九一年）、同「初期の禅宗における経典注釈――『金剛蔵菩薩注』に関する研究の整理――」（福井文雅博士古稀記念論集『アジア文化の思想と儀礼』二〇〇五年、春秋社）、
(45) 同右「金剛蔵菩薩撰『金剛般若経註』校訂テキスト」（『東洋学術研究』第四〇号、二〇〇三年）。
(46) 山本幸男前掲注（15）論文。
(47) 蔵中進「淡海三船『送戒明和尚状』考」（『万葉』第七三号、昭和四五年二月、のち『唐大和上東征伝の研究』に再録、一九七六年、桜楓社）一五〇頁。
(48)『続日本紀』神護景雲二年七月辛丑条（『新訂増補　国史大系』第二巻、三五七頁）。
(49)『続日本紀』宝亀一〇年二月甲午条（同右、同巻、四四八頁）。
(50)『日本後紀』弘仁五年一〇月乙丑条（同右、第三巻、一二八頁）。
(51) 天平勝宝五年五月七日類収「写経奉請牒」（『大日本古文書』第一二巻四七三頁）。
(52) 天平勝宝七歳四月二一日「造東大寺司牒」（『大日本古文書』第二五巻、一八五～一九三頁）。
(53) 天平勝宝七歳八月一六日「某寺勘経所牒」（『大日本古文書』第四巻七二～七三頁）。
(54) 福山敏男『日本建築史の研究』（一九四三年、のち一九八〇年復刊、綜芸社）一八五頁。
(55) 大平聡前掲注（23）論文。
(56) 宮崎健司「天平勝宝七歳における『大宝積経』の勘経」（『正倉院文書研究』第二号、一九九四年一一月、のち同氏『日本古代の写経と社会』に再録、二〇〇六年、塙書房）。
(57) 山下有美「嶋院における勘経と写経――国家的写経機構の再把握――」（『正倉院文書研究』第七号、二〇〇一年一一月）。
(58) 大平聡前掲注（23）論文。
(59) 宮崎健司前掲注（56）論文。
(60) 山本幸男前掲注（15）論文。
(61) 佐伯有清「円珍と山王院蔵書目録」（『成城文芸』第一三二号、一九九〇年九月、のち同氏『最澄とその門流』に再録、三二一～

三二二頁、一九九三年一〇月、吉川弘文館）。

（62）伊吹敦前掲注（44）論文。

（63）山本幸男前掲（15）論文。

（64）蔵中進前掲注（47）論文。

（65）高木諱元前掲注（17）論文。

（66）伊吹敦前掲注（44）論文。